弘法大師内供記

一

597
1

京都帝国大学図書

門 4
八 4
雑 551
巻 1-10

擢乃ちづくれるとくのぞうきをあがめてこれをこひ。
わすきをこぶるてを接をとり。ひろめいづ世ちの
揚ひづ世ちの芳世ちをたれハ結よハ見ぐ世ちを尚く。
門ちをこうこひ書ちハ初ちまれるをかめくるぐで
よ世ちの実ちよ有ちれ。そちに世ちをとちん。
それ第一ちにのぐりて下に月日ちよりよ名ぐで。
わちふをこびぬ山下ちるよそびえ世ちふ世ちる。
人高徳ちよりのこ横ちよちてつ世ちぐりつ安
りて第乃ち擢ちぐりあき中に世ちて世ちやくし

きゝハ人にあらへふかりけり。御まえその心をうしろへ家
僕ハ砂より起く其乃徳を盛ふもろ賢きハ玉
よりもとりしなほ又百ふもめぐりぐ千載ふも通こと
まれ也。第 光仁天皇の御宇宝亀五年甲寅
乃年ふ讃岐の国多度の郡によふり
誕生ましませし大士あり。人の形にして化のさとりを得給ひ法
の綽ハ空海和尚。登壇受戒乃ほ名ハ遍照金剛。
後よ 延喜の帝弘法大師とぞおくり給ふ。天精粋
をゆづりて宝亀不思議び地蔵霊を見ぐいくさ十まり
かゝやき。生ずかゞに寂寞乃幽蹟を尋ひつとめざる

に真言乃大事よ有けり。菩提よ行 聖王その願
ひよ任て。ひたすらにして法をまもりしる人に擢じ。延暦の
末よ遣唐を奏て入唐し大国乃始に機をめぐらして
帰朝をとげ給ひ乃たゞ心目ふいつでつまびらかに頓悟円満
是時ふし密宗元九親王もれども猶その瞻して萬世を
ねまたば。歩かごつ黙地にや文道を化せば同運の便
つ宮と流されし陰静念需ぞ智を振へハ文殊縁
筆を佑し悲を使ひ観音ま眼を得し密宗典学
り出まば猿猴にて文義をまとてまされたりとおもひ
きの菩薩ふつけハ子角ふて領英を捻やしるた

わざとうも微妙とはいはば。宋玉唐山と陶淵明と
どれだ。李氏四と周茂叔とを牡丹と蓮花とを
見たるよ馬場の古人とも。
しかるに。伯樂のごとくに見識ありと稱
せられたまひしとき。世間にとりて身をいかに
ぜんで。廣き海ばらに。初めは一樹の花をとりとめて林
よ入る。今どぞ。一唱も唱まは。世に拍手も唱
ん。偽敷紅わりと。嗚呼。先来の
作者の。

燕僥の乃ち。紅の乃ち。一唐眠さめくれ
ぬと。曉来花よ射して。閑生をとりもむ。
雪乃髮者し。人行のわとを。ひとり。紅の藤
かよりつ。蕾をとりくに。
ぬ。紅のちりに。ふりて。
きおとりく。掃てを。
小雪て。雪をとりつ。
白ひ乃。光。行ふて。
信四と。賞べ。
云いこれ雅ぞとりに。

りけるがさき先刀を頼べとして櫃にかくしておけり
をりふしに序を納りてたべよばゝにちよくと云事なれ
ともかく父と被く序を書山を見て鵝を紙とゝる八首よ
野人のなと不足事とかくしてさてとけがせと八十契人の
言事や御元と宵の腸をうかゞふ人にわかる事あらば弟ゆゑ
や覚ぜんは人のおかれで筆を執り練に酒添銀のとくい
江海も此硯も漂ふにぞ立て王羲之の類はけうに似たは近
蒼然の一巻あらんたゞ恥をわかやまかと極る歯
とにつきせす雅さをの紙硯唾しておそだきまく
いざあへとつかね事也

弘法大師御伝記巻第一

目録

大師御先祖の事
同御誕生之事
御幼稚奇瑞多き事
夢中仏菩薩と清談の事
法の為不惜身命 并 天人あまくだる事
外典の法勤学の事

内典乃法勅字并ハ梵字
笑法并ニ教指法ハ他わるます
求聞持ハ打念并天ちを飲てこるの
宝戸御ハ国居并ハ御ちハます付悪鬼ハ法ハます
位置国様谷天物ハ法ハるの并宝ニ文字を
りて天魔ハ法を削るの
七仏演ハて天物宝吉并金剛頂ハ基ちます

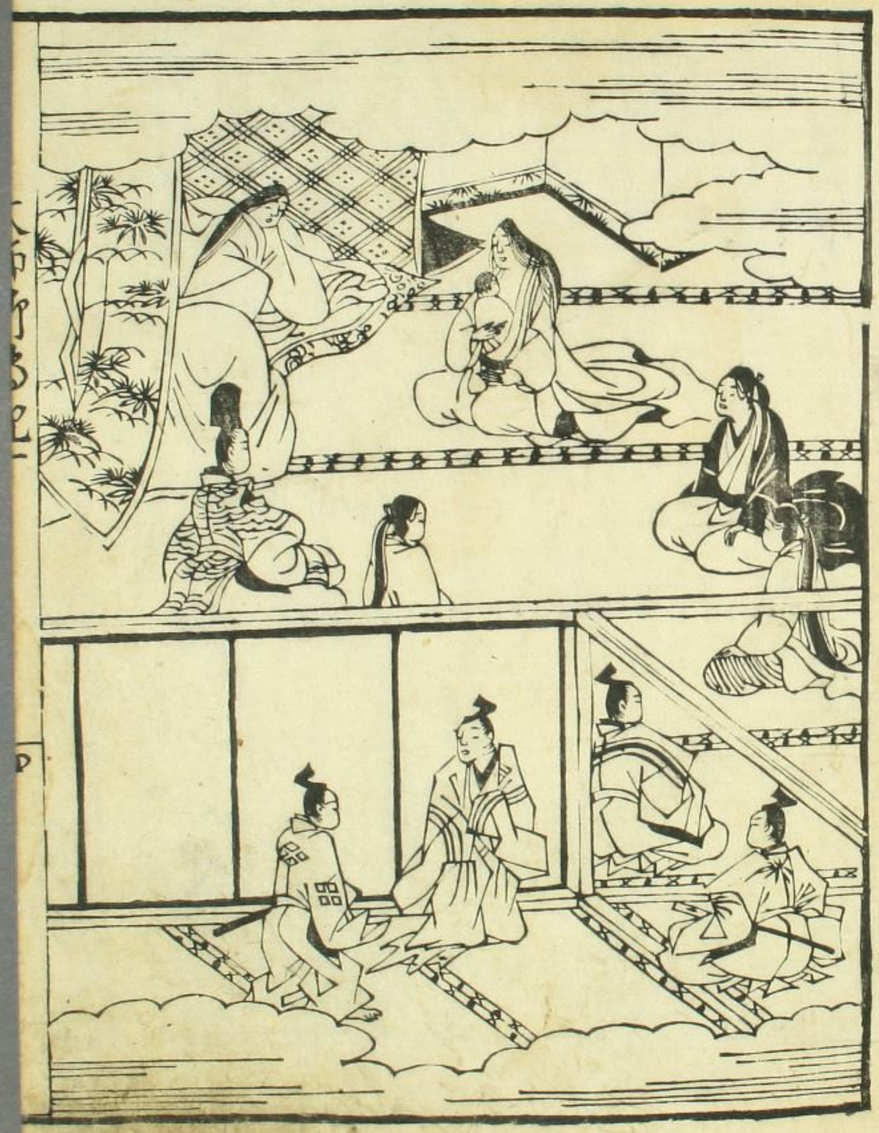
弘法大師ハ佐伯氏ハ父ハ佐伯乃直氏母ハ阿刀氏ハ
称ハ玄翁ハ云乃ハ和尚ハ大伯の物語ハ法大師の
横波ハ玉ハ云度新屏風浦ハ云ハ所の出生ハ
ぞまりくけの父ハ佐伯乃直氏母ハ阿刀氏ハ
とハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ氏ハ
一天照大神ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ
てゆまてるれかんぐこ日月と掌の中みて天の岩
戸ハよりらこそりたまへハ天下とハやとハなり
けの八百万乃神ハ神ハ集ハ集ハ集ハ集ハ集ハ集ハ集ハ
おうてかぐらを奏し給ひぬとうぐさめ
ばうえ戸とをこうしひらせ給ひけの時天児屋

相のみて。全力雄命にて戸をとうく雲こえ
うあげをとてゐ八百月天よりやさけて
也。そ乃一神あまの川をとのつとを考ら浦と
ゆたてさうつへさ名を名きりとと和神あり。
そ乃つをとを多数とこ治一治へでこうし市
歳のあまるとよ地とわちてさぬきの国とた
うつきうちもと市子孫代こあひつくへて今を
海乃神とまてかうまあ。讃州と成し
治へ。かくて吏姫先くたくさうへまつくて。
関ま神四国遍とうやまひのは民と伊
つくしこ治へ。あ名ゆきうふ行さまりあ。

れうりうかつせこまうびこいまあ。きりいあ
まてど四年乃春れとひとあへでぼる一人も
海ままこ吏姫こわといけうくきさ物よあ
ぬきつよ神力きまいのまとさ治ひけ。
ある秋ふう姫乃ゆ春よ天こわこれひで
まあまくぶりぼてころびへあてれば
めてうもぞ八やぐそえよろぷうぬ又乃日
ゆめ命あふてぞをゆめうこたぐあるら
あればくこ国年ころのちりやりあんと。
すぬこをりこ国こうめうろ

大師御書記

大師御傳記

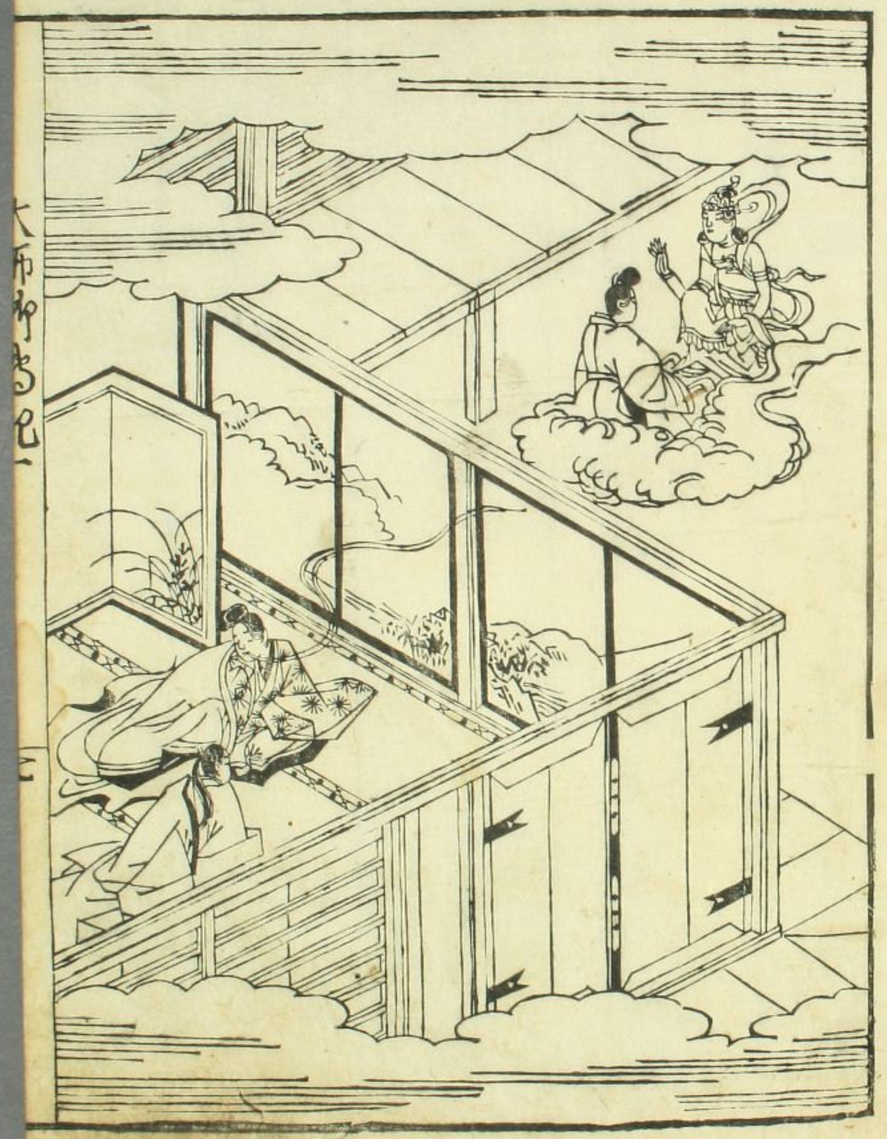


まうけよ。きさき月をもたぐあるねはんとあるせをはひて。十月あまり二月をへて。御誕生給ひしくをけつまごろ。人皇第五十九代。光仁天皇の御宇。寶亀六年。かのえ寅の年。西紀生給ふ。父母よろこび。四子をもうけあげ。兄あんべ。猶嶋とのべ。ろくなるあり。弟ゆまろ。妹ゆまろ。かりそめ。御門。白髪。乃化現なるべは。夢とおもひ。人々。あはれ。世をさとりひとそれ。寶亀。あんべ。かんとく。りてさるまろ。いふまあり。

父母の慈ひも中にこれらの他ばこしにまさりて
ものゝ玉をとりてあそぶがごとく志てさまやうく
愛みける。ころよりも利根発明萬人に抽で
何事につけてもおさなきらにはすぐれ給ふが
しかりそめのあそびにもつゝしみのこゝろ
幼童のとりてあそぶ嬰鶏竹馬のつゝみなさざ
ハ志てさまつりもつちられとつねてハ仏菩薩の
像をつくりまつりもちいて堂塔とな
ぞらへて小屋をつくりて仏をあんじたてまつり
うやまひ礼をなし朝夕の御つとめをなされければ
母ハよくあがめておもひてかさなると貴物とぞ

おほせられけり。そのころ官氏若使として唐より
國〻へ勅使をめぐらされ下向ありしとぞ
先にありある時ちよくしざゐさの宿へ下向あ
りし所。直氏公これは庭のもとにつまどをとるさ
まにおはしまし空海へ門外におあそびの所て
ども仏をもあひまししくそ仏をつくり給ふ
おくしこれをとてかそぎるまわらびおりつきん
て空海を礼なしまかりまかり出しをあやしと
く勅使よりひゃうらはいしも勅使の御尋
ねしてこのわさなれば礼しなさまいりとぞ
しもよてれましたとやみれバちよくしのさ

さしひけるはぞうくしゝ丸にいれがまれたる那
たゝうばやされなる古佛とゝうむ兒
い。精紀乃人うや四てうまわまくごつまたゝうゝ。
けうゝうゝと蓋をけうけ。鉾どうばけ
ゝ四ごゝ紀ゝ又礼ゝとゝうたまゝ
おゝいよゝたゝうひ者と



さてあるとき乃公まとつくとてぞ申さ
ひとりとなりぬるとばいうばして神妙
とのたまへりけるやう爾こそいよ
らせあるか宣旨より出たる乃出てうぐ
をけるぞ。あるくれ沙羅夢うり。八葉乃蓮華
うばして。佛菩薩と祖師たちまちとの
ゆめとこそまひたれば。よく佛菩薩
ありがたんれんとばうり

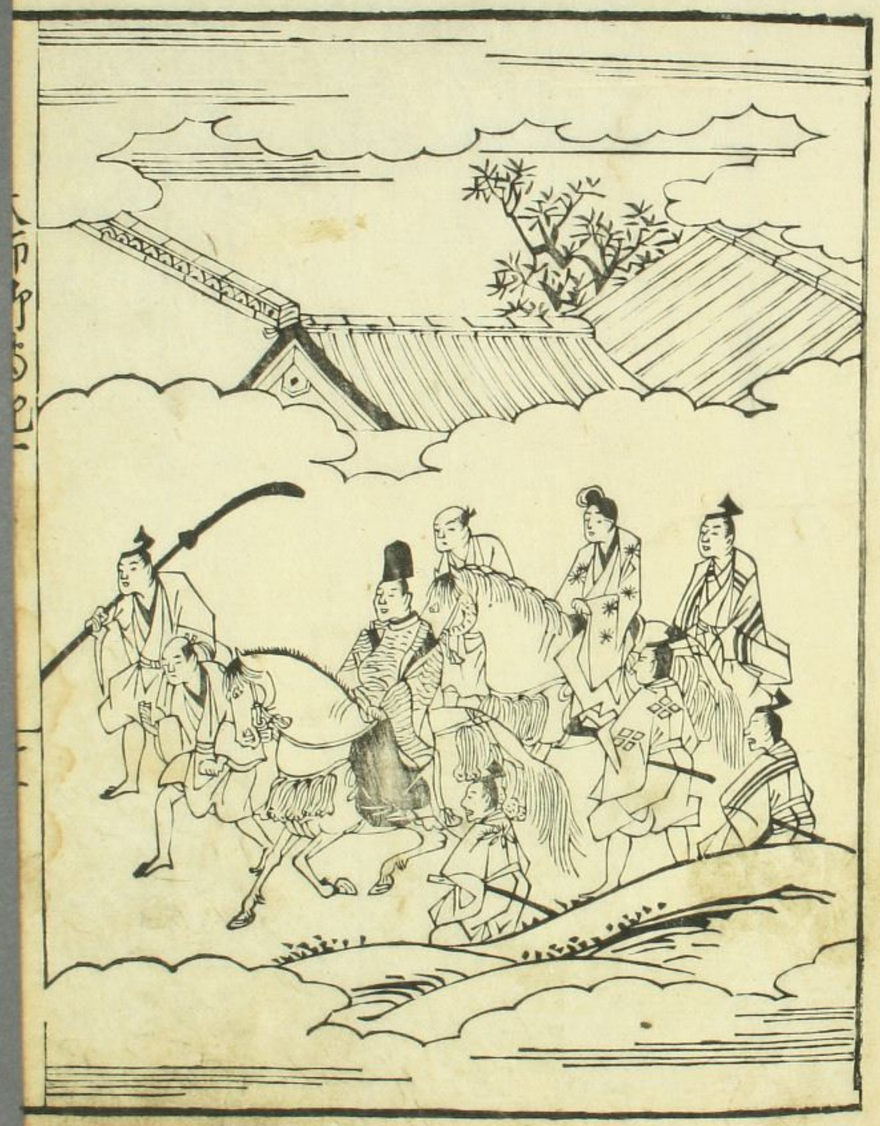
ぎうんぐ父母のひとりまうてゆまをば華
ぶよりて蓮華の花そこかうひがさかうべ
と御義のまゝもて父母みはかしら垂ひて
ゆのことひそうさうあひけうがなすゆまに
はまゆまだぐ佛弟子でなりんことの
このさきひろれば父母も出家のまゝいかく
れば弟子をよくせ給ねども義おもこひ
はんのまうさはんとゝまひてぐ給れ
りけの身のわがまゝなわ給へんぞるを
まうくらぐ先たくさうもんぞ下り御成人出
たまりぐ佛弟子とおそまうんとぐりくのさ

まんぐ給をまうさはんとゝびうぐりな
し御教のわぐどとまれとまうとたさうん
あやひそうゆはやうことおのび出く國のう
ちふけりさ出あるまうるぐ そのあのこはを
そうくとだぐ一人はのかつまありて十方と
礼して三宝よりひさまふかぐんさ礼と
を佛法を初めめく元服をこうびくなぐ
の西門とあんまめぞこれぐめさぐのち
とくひさまんぐり又やぐまく後ぐ出あ
らんとれはり先さばはそすけよあげ給
色うぐばさうにぐこうびねち死すんさあり

と。稲んごろつよ結仏へは鬱蒸あるうく巖石滅
滅とそぞえそこぷそこまるこ谷へ四方をた
しぎと好く荒しく勢ひへぷそくまわ天人あま
くごつま中ろくいでさはげくてきつまぷ
とれはくろごろ石ニごろなきまとあくと
しそ海りんとる。三度とげせそ海へどを
をこうもつぐきく天人いでさはけそ海
むろ刺

さてい給はもゆがんぐーのかどとあるれこあひ
ろうろうぬをいとあはりをて座ろうとたてを
へつまのひぢうぬていよて父母ままかて給けう。
涙てこんるぐこ永山仏ぢーあるもーかいあーへ
乃富山童子。常倡乃文よぢ勇と碧さうせ給へ
まへぢまこ初雅乃海勇まて志ろ先されね
るもるべこんぢ世こ海ありこいへともぢまろ
ぢーかるひけこそ者ーざまれ佛業蓮こい
いひかーぢるこうるもーまたありそれしり
てーの山を修勇が嶽とろづけて今よはこて
皆人まいろ礼ーろこんさて山業こうー勇

給へ。業勇石にとうー書とうんでいはうー
数千巻とひるがへーあるはは母ろこの伯
父ぢ乃刀宿称大臣ーいへまーくけるが法也
位伊与の親王乃子ろうて性子多先のへ
ろくあるれるそ海十二の法ろーもぢはへよ
法ーく父とあーむあへよ生れかーが乃先智そる
ろるまーばぢるれる書ををーへさをあへどー志
ろくあーをあまてあーうとれるーを給へ。
大臣ろ実ーも書矣乃知ひとあーがーる生智
安乃なるまぢいあーへーりてーもさーーをこひ
仏弟子ろはあーをあろーをぢまづ加典乃文成も



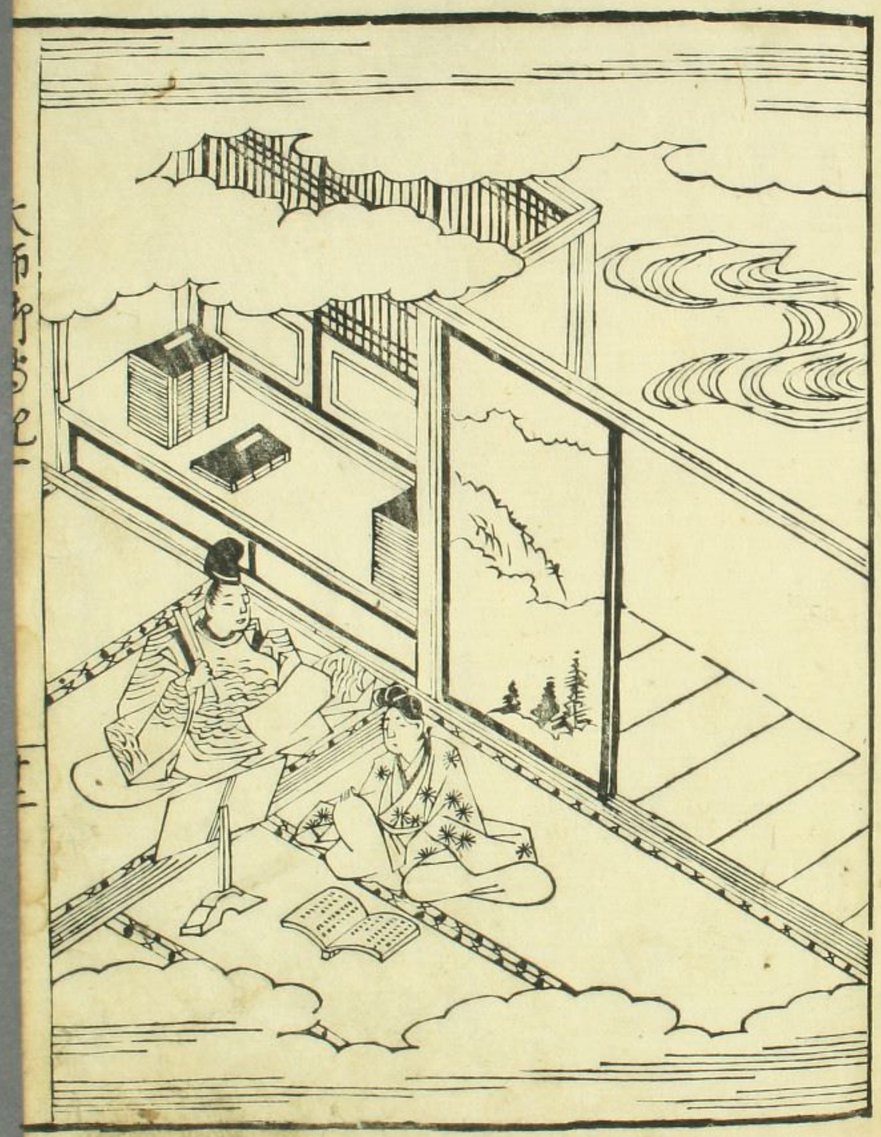
あるひ先ゑこと父母よいさめられるまゝにいとまとはられるまゝかさはも解まゝにとまりあひあつまれるくゝ新へよせきたんす。

ふりて行て一日くゝと西へよりしばゝ大江去て勤学はしとをちめやされるまゝ西海道はるばるくりあくゝ父母とさあくゝみやあくさゝ。

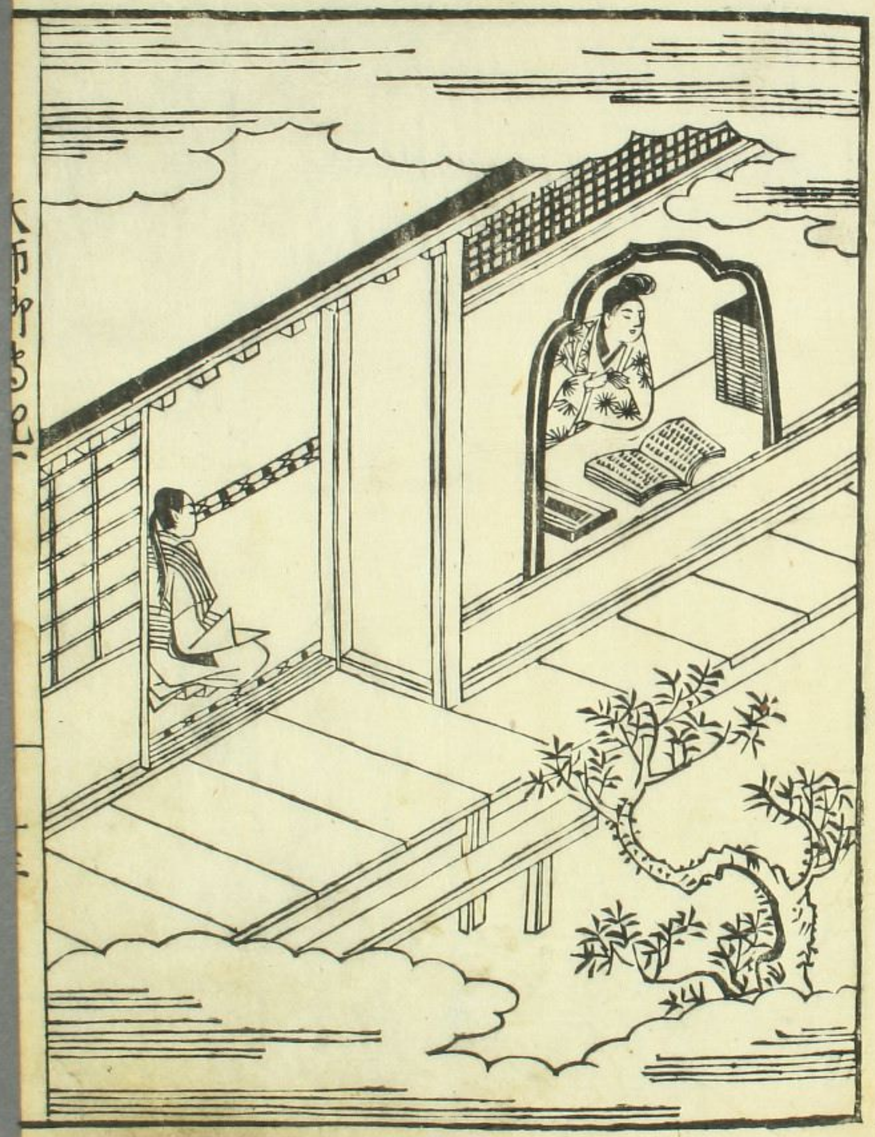
はいて海をこゑゝへばうらうらつゝ山川乃勝つゝあくゝ

と勇さをぐめうれも我ゝ乃ためそとして高まの年とゝかぞ。但愛太宰よあづけまいゝせゝや

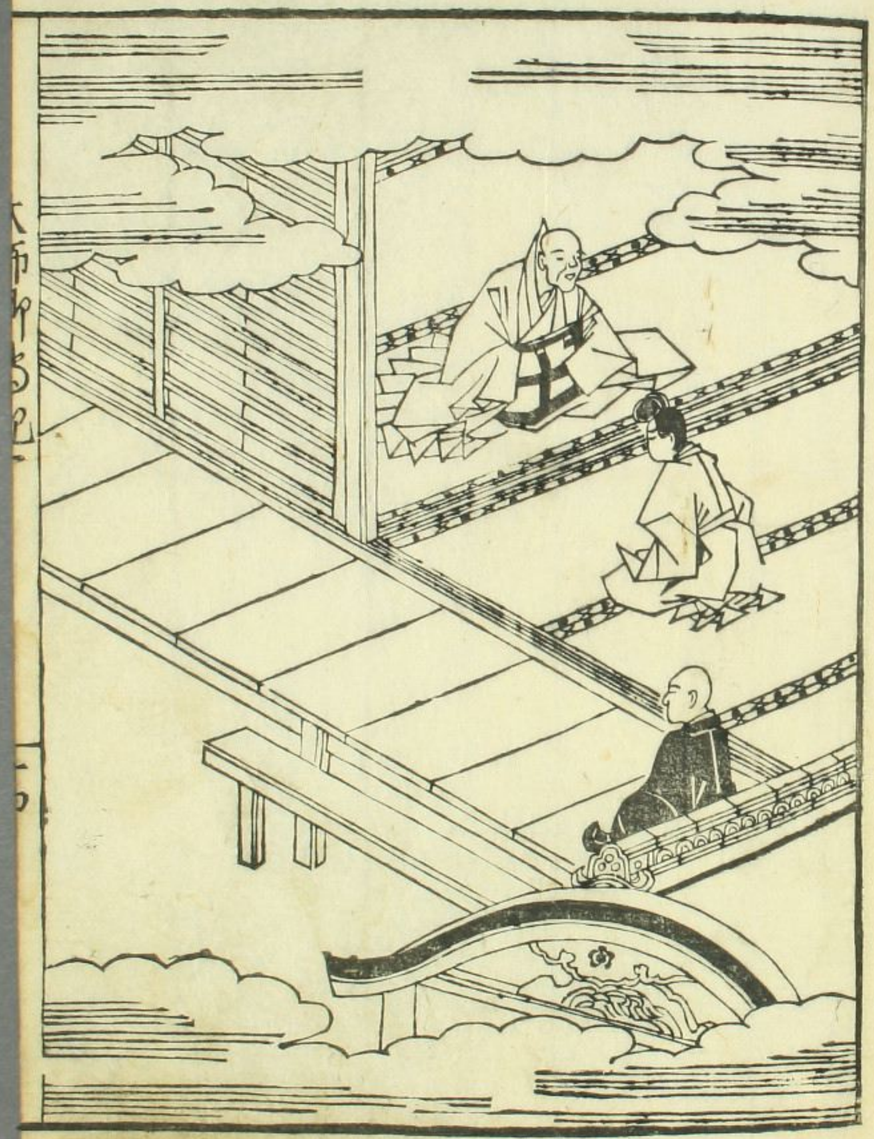
こよのがさを移ひそら



そもそも頃字亦稚味酒乃浮城とゝ物字
ゝ稚るゝ宮殿浮城と和典乃所ゝ浮ひ元結乃結目
書おとゝ和ゝひ海おび勢おゝよ。一を世て言と
はゝらさまゝ浮城も楽ゝゝゝ家乃絶
絶とするところさでのゝりるゝはゝさづけゝ
てまつるゝそれなるまゝ畳田乃恃士ゝはゝひ
つゝそ氏吉林とまおびたゝ元ゝやゝに
ゝんぐせゝを絶ひゝゝ



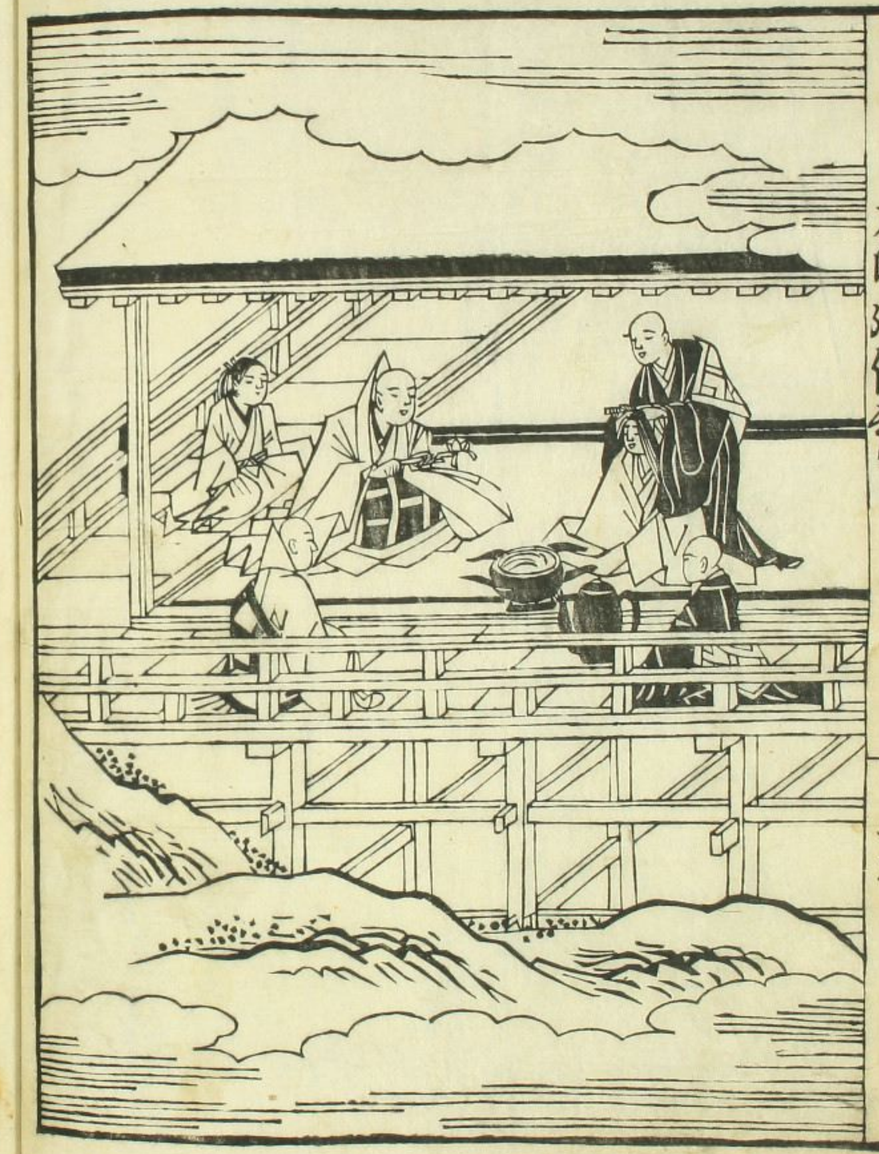
蜀書のまどよりはまかこをさしし。漢書乃不
しまづきめはひらとをあしらどをとめ
をげをあへはつひ乃人ゑ二千年の学業を。
月ゝ雲年のうちよをあひて学
まをびの花実時を待ちて到ること千年
載乃実結ふ公孫うちよをあ。一紡の綿
織ふ竜のさたりあざやかりぶまはをやは
ふよかゝふ重をとく。風身の光をりるをの
ちをとや



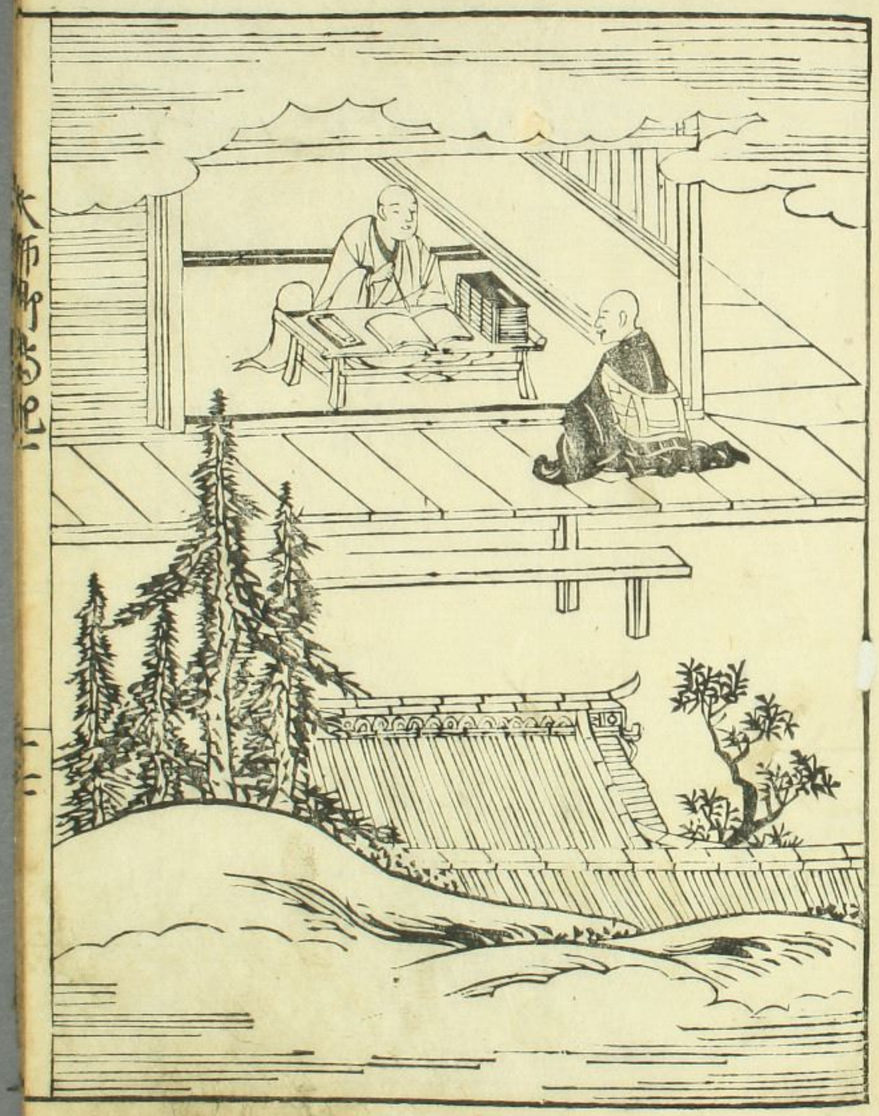
さて佛法ものごやうあるべしとてこれ
ぞ名知識の勤操和尚の弟子に入らを
たまひしより此和尚とやもとは三論宗の名
德にて世の人さきにこれ和尚とくま
しくしりぬ獨覺の親はゆきのうらふあき
なうにパ不乃理はゆきよめるを世間
人的星乃化身なりとぞ和尚より對面
をこれが勤操和尚のまひしるはぱ人の相だに人
よりあるべしとぞ其よりこそ師弟の此
契約あさうじましまし

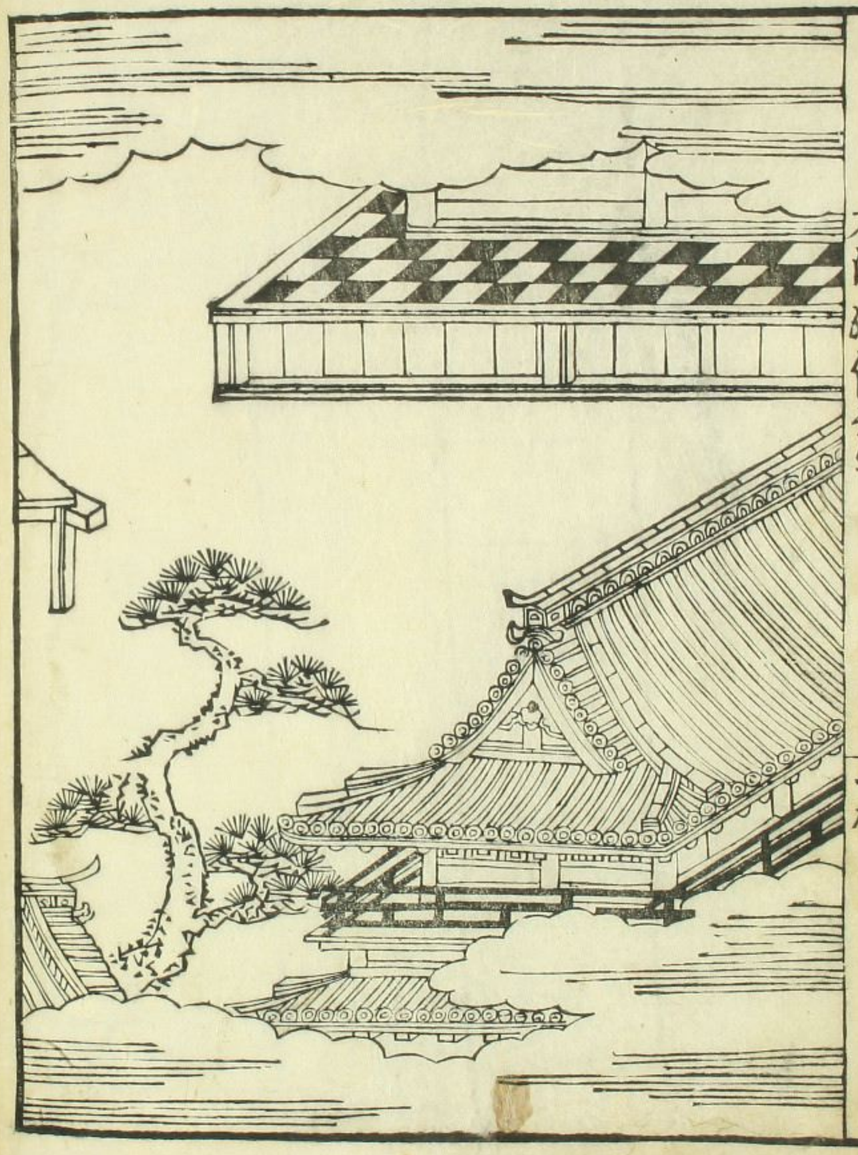
そはやがて。御宗要の精要をよりおもひまい
らせくぱかし二千とやに。つゐにはれかしとおろ
さ努まひて法出家とをとげさせをおひすゐんら
御年の十歳。七十二の威儀をさげらるてま
つり。法名を教海とやるり。法臘りおてさ
らをたさりしかど。一しやう三ぞんの法要ぞう
の。教もとをけ瑜伽の法みよ。三密の月をも
ましのハえめりらせよ。如法の風光よ独覚の
観とあきら光んおもさきろさ。いねてさ光んて
も御持念をとくを法りしかど。やがては法めん
おうましくて。八大宗の覚苑の法。結縁室宗

苑の法をさづけを給はく。又法名を如空と
あらた光んさまひね。さづけ給たまふところの
法流源らん禄んじやうじゆましくける



そのうちぜんにんにんの
ものの乃戒檀院うのかりたさひ奥豆戒とさ
ぢうりゑいんとあた先くそ海とくづきた
まいよくは授法あさうどだすこひまり
海して佛教乃ありがさふことをうくとひ
入信愛のうさかきまとのべて導賛指踏
といふ書をこ奉たよえうひありけ人よ志先
行ふ今のこ愛指細これあり





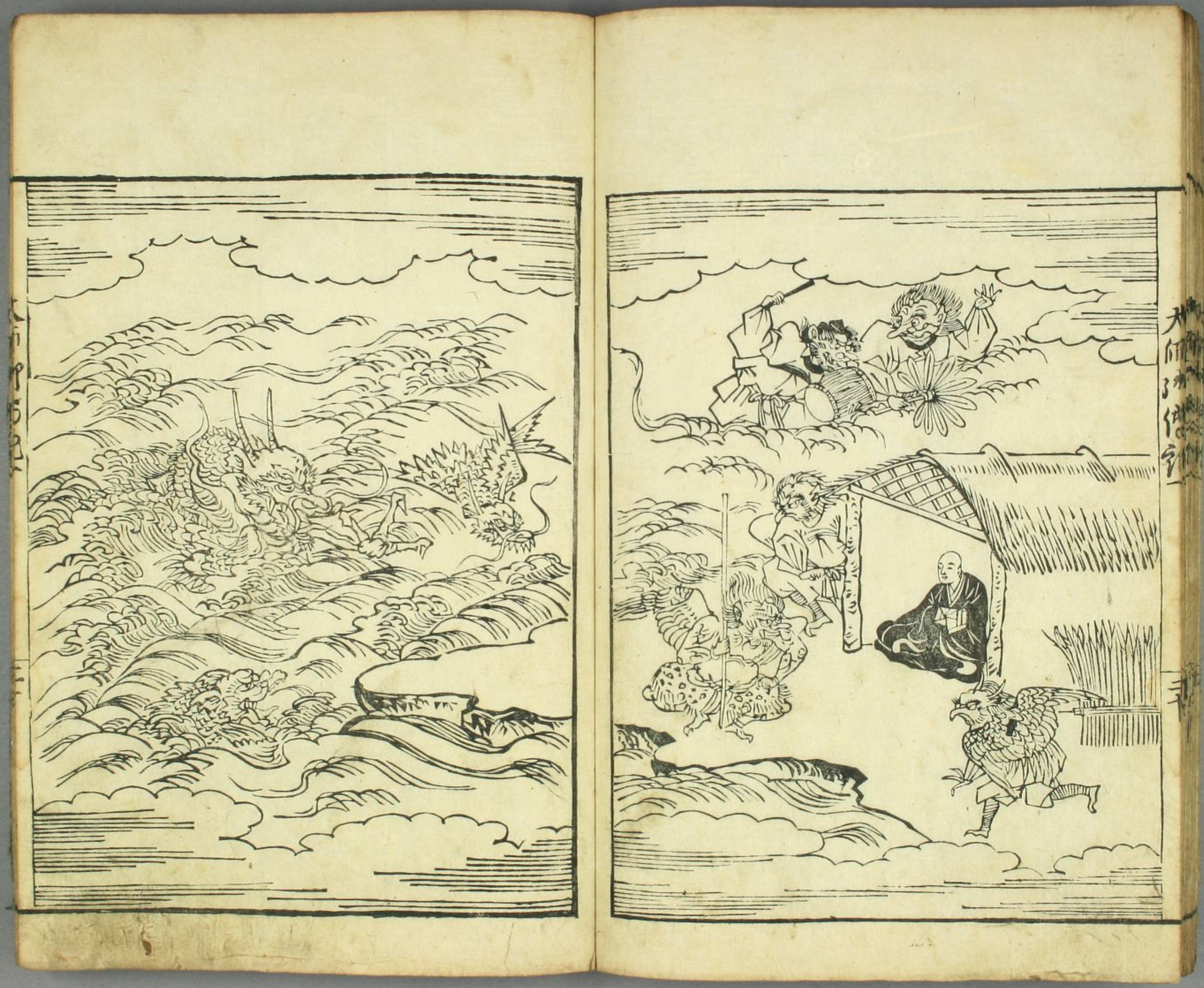
そもはるばるの大海をわたりて、蓬莱の洲をたづねしかども、
蔵の山をもとめしかども、たちまち風の吹きまはされて、
天竺の大海の波とび来りて、ぜんまいの船、
しゆもと船のりの壇九とよたちまち、山海いま
よとりてがうちにうるまてあること、
のきぶくとかうりあるとバ、ようくはたとまる
しえまへゆへ、いまはのこと、ようくはたと思ひ
それ、行たる志るしもおりあらうも
あらとうや、ぜんよ、宝物のあるーとさあり。
ゆるはとうきつ、ゆへありまこにうがこと

さてゆきのぐやうは第一にそれぞれ勅操和尚はさぶ家わらちゝ母御はこゝろ悲哀
指の法とゆきのぐやうあるべしとおぼ
ゆるこゝろぐうこゝろ無わちりもみざるをかりめ
ぬ地とすゝ先んとそぞうことと約束した
さんべどもはてゝろのとまる地もなりけるが
ちはの宝宝戸湯とゝろよつきはへ
いどやう地とぐれる地あるもろ。雨海ろ
ゝたこゝろさそば。湖こゝやしてゞもんてどもを
叢ろこゝろよそぐごち。杉とゝろふゝねのわ
しゝ牡鹿のゆゑんとやぶわ。岩りこゝろ

いそのうすこゝ塩の塩ゝ塩ゝひ材料とを
ゝ色でゝつゝを水鉢くゝりてはこゝたこ千
世界をゝのさゝうはきぬゝゝはゝろ
ゝうゝ塩地なゝればゝろゝびゝ
ゝぞゝのゝさすこゝうゝ紫ゝゝゝ
ふゝゝろいゝりとゝもゝびたゝひて。宮家寂
野ハゝ米のゝをゝゝようゝひ昊木昊ゝゝ
お意の地新ゝりとゝをゝゝたゝ一人ゝろ
とゝゝゝてゝりゝはゝゝゝよゝそのゝん
ゝゝちゝゝゝゝねのゝあしたゝゝこゝゝゝ
ゝのゝこゝゝゝゝゝばゝゝゝゝゝゝゝゝ

とおもひ給へ給へつゝもさう物たまひてゐ千一
字乃ことのくさをぱとゝひてぢいゝりろうゐ
りうさつけさうぶ物語
注情乃ゑ書といふことわりをめは
うゐのあをこう物ゝせぬ日そあさき
とゝのそゐ。なぐさまをたまひけつさて法
きろてをゝやうぶ。なゝみまゝもさゆゝげる
ゑぢりといぐゝうぶすこうぞゐ。かゝ歌物の
法とゝるゝ。ねん会ゝゆゝゝもれ。海平乃
ゑ物語ゑ奥ゑ新墨形よりゝさらと現ゐ。
よりゝゝゆいりらゝさりゝぐれたゝめぐやう

とさまうげゝてきゝんとゝおゝひいうゐげちゝ
動風とゝゝしぢゝこゝゝ大絶形とゝゝゝれま
たいりゝゝをなる母とゝりてぢゝゝろ紙
まよりゝゝゐりゝ法ゝとゝゆゝさゐんとゝけまて
もゐどゝうもさりゝぐたゝりゐどゝなとゝは物ゑ
れゐゝゝ動語りゐゝゝゝゝ計ゝゝゝゝよゐゝ
ゝりまりゝりゝ歌ゝゝとあげゝ奥形乃ゝめは屋と
ゝりまりゝゝゐれゝゝんゝと初ゝゝれあ
ゐり



霊海志げりの庵をたち出させたまひつゝぞよ
やゝあらむ志げりしに九輪持の神咒をとなへ
西あへば、はや明星とびいりたまふとおぼし
しが、虚空の雲ともさきいでしあへば、雲海庵
ひ志げりとて、たちまち化らうこやうかくやさ。
よおくひらり海中よりいつまずさまじかり
それは、ひらくの悪竜悪鳥ものひらめかれ
うまそでならびまふ事もなくぶよく流
も志やうじめ志結ひて分かさそうりのけと海
ゆくいやせん軒端にけむし来さち物かりを
まば霊海ほしめしたるハ杉のそ志やまん葉

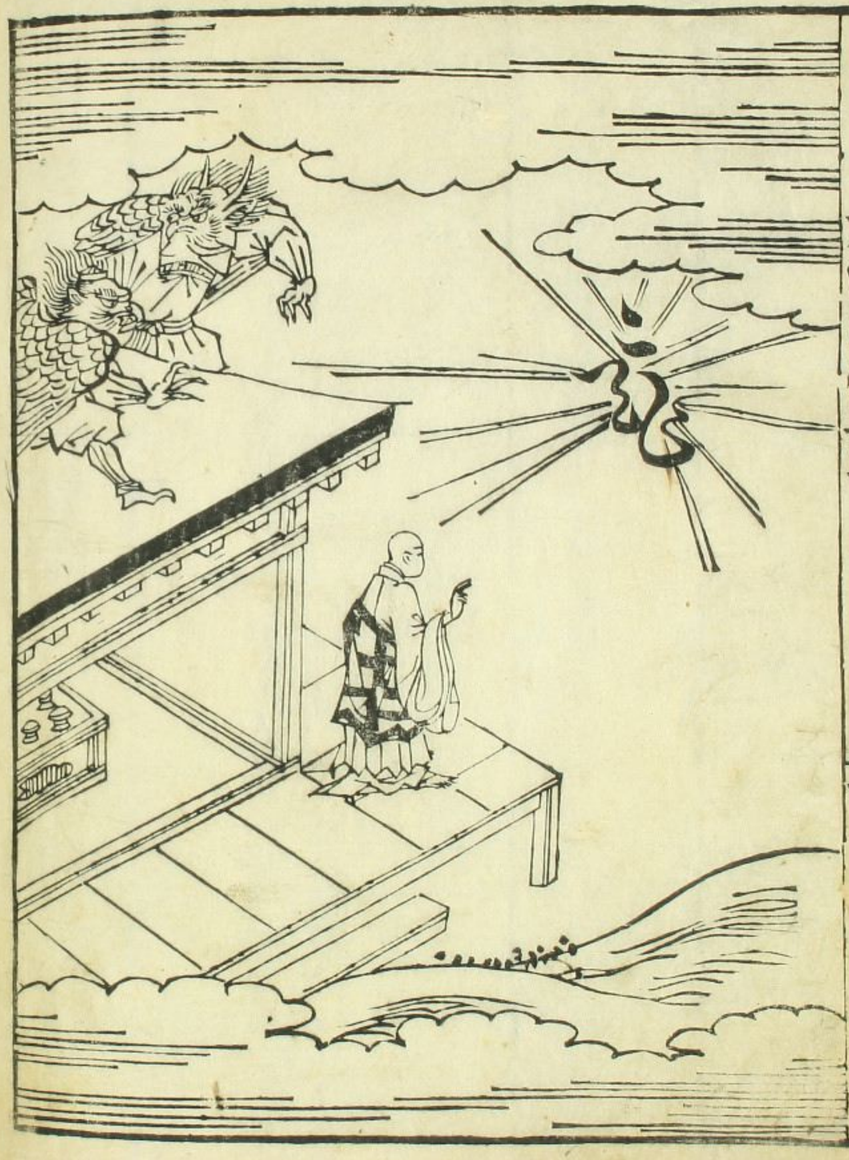
かゝるもの宿すべくもとおかいいまし給ひたり
ふ志げりのあゝすこの事あれば、かゝれど、月日を
うつまろよりてはしもすゝ事されさを給ひ。
は庵とうちとて結ひて、何事もなくけふ当
ましくけるがくて、草鞋の仕ゆく身となりきてば
志西ぞやうわかましふ伊豆の国桂谷とふ所
よ、あわりて、箱山あまるきるあれば、福来おちて
をこそていふあらたにいきさぎやうちやもはなる
よ、一日一夜も住するりのかけまいばとのびらん
君雄来もたえたえて夢やおされていふ霧ふ
ひの高く籠だちくいふ月常住の灯ども

ぶことはかくふかをとやまことにうあてくんの屋
をらんべきやうんをうりーかるくの宝麗た
仏のまくふもとこれ
あるちーうどかをあさしまるとは強んて色こそのお
軍法の不あれとてぎりをあるひくは彩はお
こうり始りぐたりーあ一ろうに薬乃こく夫物
たちくの山くかーこのうひくあるいまりあく
ちーとあしづぐさとたくき彩はとさあらぐろ
浮宴ふわくくを宴微笑ーなるひ杉よ麗
蜀とやうり仏地とうたべきうのとたかり
先さんれがんちぐりうふはあるぐやうわりく武法

と唐よはーあ人い麗紙丸色とて人あるぐこ
三千人の布あんんとたがーき夫ふて一度
ふるりいをわるえとあげ。ひろえい屋の様をうん
でちるとゆをつるりふぐさんとしえ大東叢ふあ
どとなげつきあ風ひたしを。榆仏の壇も
ふぐ彩くぐりあわぐあるるき様人昌の斤
時も壇てとるべきやうもありしえ宴海と
あるもたどあさ始りぐたりるえかふかくまれ
りていい始終人のまりとまんこぐるひがるる
屋ーとたがーあぐちく夫物よあくとれさを
ていかあるまどふくく宴ーよりて大脇あ

の魔事(まじ)かんをあつけさせ給へば虚空(こくう)に文字(もんじ)
あらはれ六書(りくしよ)八体(さい)の點畫(てんくわく)ことごとくそなはり
てまのあたりおさらに文字をかゝりて文字(もんじ)よめ
たまひやうかく居くらして十方(ぢう)をてらしたれば
天狗(てんぐ)どもおそれをなして八方ににげ去(さり)
てあくまもちゞくまよひ御方乃山く苦しをとゞ
めぐりつ来れり。空海(くうかい)は大く御持念(ぢねん)あれ
ば手げりて大日如来(だいにちによらい)乃真言(しんごん)三蔵をとなへ給ひて
さる乃手観音(くわんおん)安置(あんち)しおきたまひて給へば
いよいよ悪魔(あくま)障碍(しやうげ)をさりぬ。かくて所法(よほう)を恐れ
の地と定めり。当山乃まもり神とぞ崇

ありけるぞ其の御入(にう)定(ぢやう)たまへる百せいありい
あまたくぞそのうちに千もえんありけるそのかく
まなくいまの代(よ)までもめぐくたえさ霊(れい)地(ち)
とぞありける。梅丈山ちをとなづけく弘法(かう)名(ぼう)
なるとまあり。これぞかりし霊(れい)験(げん)あらりしも此
うしがきことまでもなし也



それよりこの仏のあるよりはるかにひさかたのひろ
ひろの海原乃ごとく町ばかりの亀ばかりの。海原乃ごとく
ひろの海地乃ごとく。空海仏菩薩と云るしるよ
りこれをおがみ奉りてとしたりしと
ころ給へばほとけ云やあれかしこうそれ
ちからをもつて亀のうしろと亀けたる品ひろき
ぐしゃ。ぐしゃのりとこれをみるに大きなるうろ亀
ありゆゆしきよりの者とうろ亀
つるよ者をとりゆゆしきとあるこれ者ありごとひしう
ちよりつかんとすれば亀ありて。
乃天狗たちまちあらはれ出ぬ中乃

かま
竈たかのあひ
だひさまひてちぐ
ぐと高雲ゆ一天の宿とた
ゆへば天物ゑそちさ
わぎ。我く歳支ぐ
かまふまり。さ
へいるまり。ぐ
きやう。なきこと
くとねとたきさ角とあ
けるに宅函すう
あんまり海とにぐ
海さげとり。仏蔵ちんうかさうとるぐ

ものありさうぐけ花とたるもとぐ
まぬきて。ぐとるへさまへばかりのり
つもちふりにらとえんりえ出けるとるさ
まふとちろかちんぎん出男れ見あれ八方
ちりをえこれ。ぐば天物ちてはりさう
れどろさどのくちりよむをびつぐれいう
のんまぞそかりりをとびお。四國八ちう
うしびさりけ函

さていおりふしまくあり
けりうは慶長どし
べしかくていあり
とつくらぶみひて
弦男まくてつ
くりちんご。
乃重財頂ちれ
まあくとくつ
若邦様
のあくまとを
して。

さ勢弦ふあり
よ。
いくあ
りう。
ちあ
まあ
をは
り弱
とあ
ち伴

しとぞ乞出しめ給ふ。老婆とるゝ事を
ものゝ強きさまにて毒蛇と云
こゝと現じ給ふ。うちまの蛇ひるをて結構の性
おとを出しめ給ふ。ほうらひを光あまづんてとに動
を我金色の光とおもへり。
金剛山の雪のさむきをしのぎたりとうもり。
衣のうちをとりてひとへなる蚊帳
も數梁をとりて性を慰物たのまんとす
にとりびとりやまこゝに性化の法光とゝひ
なりぬ。ありがたきるもの也

大阪府立図書館